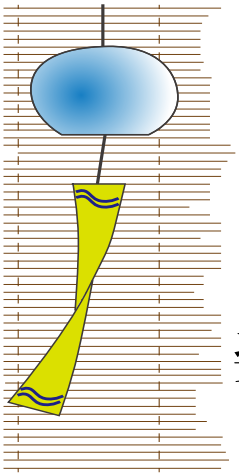
KAN

環

夏姿
2017
第 27 号

千曲川地域の人と文化

NPO法人上田図書館倶楽部　　2017 年 7 月



夏姿

深みのある青空に初夏の雲が湧きあがり、農道に面した一角には石仏が鎮座する。土地の所有者は、「大日様（だいにっちゃま）」と呼んで正月には注連飾りを、お盆にはお参りを続けていると話された。細い眼に鼻筋の通った柔らかな表情は、祀ってきた人々や農村の歴史を感じさせる。塩田平の風景である。

表紙写真・文　矢幡正夫

contents

4 巻頭言 ---------- はな

方言力

6 寄稿 ---------- 山口　登

自然を友に信州の日々を楽しむ　（四）演習林の春

13 波紋 ---------- 木漏れ日

ズオン・ティ・ゴック・フェンさん

14 セカンドライフを楽しむ ---------- 伊藤文子

チャレンジこそ人生　　橋詰一夫さん

18 ぶらり散策 ---------- 吉池みどり

伊勢宮大神宮

20 上田情報ライブラリーでは今・・・ --------- 望月聡子

「地図に見る上田地域の変化」第２回　桑園はどう変わったか

23 観点 ---------- 岡田基幸

～明るく大胆な未来予測から考える地域づくり③～

25 信濃を旅した文人たち ---------- 海野　郁

田端画かき村と文士村、そして信濃へ

30 あとがき

巻頭言

方言力

「どうすっぺ！」「おとうちゃんいづ帰ってぐんの？」

現在放映中の朝の連続ドラマは、昭和40年代、茨城県北部の村、そして東京が舞台。主人公の愛らしさと相まって、方言がほのぼのとした雰囲気を醸し出す。語尾が上がるイントネーションも耳に心地よい。

現在は地方でも標準語を話す若者が増えているようだ。そう、上田に住んでいる自分も標準語を話していると思っていた。ところが、何気なく話している言葉が方言だったと、他所から来た人に指摘されて初めて知ることもある。

今春、上田女子短期大学主催の「外から見た信州方言」講座が4回にわたって開催された。新潟、群馬、静岡、山梨から見た信州方言について、それぞれ言語学が専門の先生が講義。ひとくちに方言と言っても、なかなか奥深く複雑なようだ。

信州と隣接する地域には、同じような方言が存在。長野・山梨・静岡に共通する語は、「ナヤシ方言」とまとめられている。例えば推量の「～ずら」「～ら」。静岡では「行くだら」「行くら」、長野では「行くだらず」「行くだーず」などという。また、「走る」を「とぶ」、「かけっこ」を「とびっくら」、「あたたかい」を「ぬくとい」なども共通している。

ところが、秋山郷のように人の往来が少ない山間地域は、かつて「方言の島」と呼ばれ、全国的に例のないような特有の発音がみられた。それらと中世末期の古文献との間には思いもよらない一致が認められたりするそうだ。

方言には、いじめやからかいの対象とされるなど軽視されていた時代があった。東北から出てきてズーズー弁を笑われ、2、3ヶ月は一言もしゃべれなかったなど、深刻な方言コンプレックスを抱えた若者が大勢いた。冒頭のドラマの主人公も上京するが、集団就職列車が走っていた頃のことである。

「その頃と比べ、方言にとっても我々言語学を研究するものにとっても良い時代になった」と、講師の先生が話された。長野県各地で「方言かるた」が次々と作られ、コマーシャルにも方言が堂々と登場する。今や、幅広い世代に受け入れられていると言ってよいだろう。

21世紀に残したい日本の言葉、長野県第一位は「ずく」、第二位は「みやましい」、第三位は「はあるかぶり」だそうだ。そのほか「いかず」「ずら」「しょうしい」など。「ぬくといもいいよね～」などと、会場は大いに盛り上がった。

どこか懐かしく暖かい方言の魅力は、標準語では言い表せない微妙な言い回しやアクセントにもあると思う。その地方の文化まで感じさせてくれる気がする。

「今あるぴったりの気持ちが、その方言だからこそ相手に伝わる、その方言だからこそ自分自身がわかる、といった方言との関わりを大切にしたい」。講師のおひとり、秋田大学教授・大橋純一さんの言葉が心に残った。

（はな）

夕暮の千曲川河畔、鉄橋を渡る電車の窓に夕日が映る一瞬をとらえた。大正時代創業の別所線は、地域の発展のために貢献。これからも歴史を重ね、住民の足として走り続けてほしい。　写真・文　矢幡正夫

寄稿　**自然を友に信州の日々を楽しむ**　　山口　登

檜の森（上松町　赤沢自然休養林）　　撮影：原　和明

（四）演習林の春

連載の最後を迎えた。私は信州に住んで五〇年が過ぎたが、信州の自然の中で何が一番印象に残っているかと問われれば、「木曽山林高校の演習林の、春を迎えるときのわくわく感だ」と答えるであろう。それを最終回のテーマにした。

本題に入る前に演習林という耳なれない言葉について簡単に解説しておこう。演習林というのは、大学や高校等で林学・林業の教育や研究のために設ける実習林・実験林のことである。我が国最初の演習林は、一八九四年（明治二七）に帝國大学農科大学（後の東京大学農学部）が千葉県の清澄山に設置した。実業学校としては、一九〇二年（明治三五）に木曾山林学校に設置されたのが最初である。

今日の話の舞台はこの木曾山林学校

から木曽山林高校、木曽青峰高校へと引き継がれてきた由緒ある演習林である。設立当初に植えられたヒノキは樹齢一一五年に達しているものがある。

春の訪れを樹の花の開花と夏鳥で明らかにする

一九七七年（昭和五二）に二回目の木曽山林高校勤務となった。一年間の計画準備を経て、翌年の三月一日からこの演習林をフィールドにして樹の花の開花と野鳥の調査をすることにした。方法はルートセンサスといって、一定のコースを設定してゆっくりしたペースで歩き、植物と野鳥を観察して野帳（ルート図）に記録をしていく方法である。

ルートは二本設定した。Aルートはできるだけ毎日歩くためのコースで、出勤時に演習林のゲートから入ってダム湖の南側の林道を進んで、黒川にかかる吊り橋を渡って山林高校のグランドの端へ出るコース。距離は約五〇〇メートル。出張で学校へ行かない日や大雨の日を除いてほぼ毎朝実施。日曜日も予定がなければ朝食前に子ども達を連れて散歩がてら調査をした。七月末までの一学期中に七九日分のデータがとれた。

Bルートは演習林の中を時間をかけて歩く六・五キロメートル、二時間半のルートで、週一日午前中の授業が入っていない月曜日に、双眼鏡を首にかけ、肩掛け式のズタ袋に野帳や図鑑を入れて、五感を研ぎ澄まして森の中を歩く。今時の過重労働に苦しむ先生方から見れば、何と優雅な学校生活かと羨ましがられるであろう。

演習林の春の訪れ

このルートセンサスで得られたデータから、「演習林の春」というタイトルにかかわるものとして、樹の花の開花日と夏鳥の初鳴き日に焦点を絞って、カレンダーふうにまとめたものをご覧いただきたい。

この演習林の標高は七八〇メートルから一一九四メートルとかなり高いし、北向きの斜面なので木曽町の市街地に比べて気温は低く、春と言っても結構残雪が多い。

春、一番初めに咲く花はマンサクである（写真①）。この一九七八年には三月一八日に開花しているのを確認したが、マンサクは開花してから比較的長く咲いているので、開花日は正確にはわからない。地面に雪が積もっていても咲き、平地のフクジュソウに対応する山地で春

樹の花の開花と夏鳥の初鳴き(初認)カレンダー（1978 年・春）

	【 樹の花の開花 】	【 夏鳥の初鳴き(初認) 】
3 月 18 日	マンサク	
・		
4 月 4 日		ウグイス
・		
10	ツノハシバミ・キブシ	キセキレイ
・		
15	ダンコウバイ	
・		
17	オオバヤシャブシ	センダイムシクイ
・		
20	アブラチャン・ミヤマトサミズキ	イワツバメ
・		
22		アオジ
・		
24	チョウジザクラ・ニワトコ	クロツグミ・オオルリ
25		コサメビタキ
・		
30	エドヒガン	
5 月 1 日	タムシバ・クロモジ・ウリカエデ・ヒカゲツツジ	
2		エゾムシクイ・ツツドリ
3	シロモジ・オオヤマザクラ	
4		コルリ
・		
6	イタヤカエデ・ツリガネツツジ・トウゴクミツバツツジ	
7	コクサギ	
8	ヤマブキ・ハウチワカエデ	メボソムシクイ
9	オオカメノキ	
10	アセビ・ヤマモミジ・チドリノキ・アオダモ	
11	カスミザクラ	トラツグミ・ノジコ
12	ミヤマザクラ	
・		
15	ウワミズザクラ	
・		
21	ザイフリボク	サンショウクイ
・		
31	ヤマウグイスカグラ	チゴモズ
・		
6 月 14 日	トチノキ	ヤブサメ (エゾハルゼミ多し)
・		
26	コアジサイ・ヤマアジサイ	

を告げる花と言ってよい。

ウグイスが四月四日に鳴いて、野鳥としては春一番となったが、前回のとき紹介した生物季節の調査結果にも書いたように、移動してきたのはもう少し早く、四月四日は演習林内ではじめて囀っているのを聞いたということである。

四月の中頃になってくると、キブシ（写真②）、ダンコウバイ（写真③）、アブラチャン、ミヤマトサミズキなど黄色い花が続々と咲き出す。しかし遠くから森を眺めればまだ冬枯れのままにしか見えない。そんな中で誰にも気づかれずにそっと咲いているのがツノハシバミ（写真④）である。長い穂状の雄花とは別に、小さい真っ赤な雌花が枝の上に突き出ていて何とも可憐である。

四月二〇日頃になると、センダイムシクイ、イワツバメ、アオジ、クロツグミ、オオルリ等の夏鳥が渡ってきて美しい囀りを聞かせてくれる。

やがて下旬になるとサクラが咲き出す。チョウジザクラ、エドヒガン（写真⑤）、オオヤマザクラ、カスミザクラ等の野生種のサクラたちが点々と咲くが、校舎の窓やグランドからは見えるけれど、写真を撮りにいざ斜面を登っていくと、全く梢が見えなくて確認することができない。

この演習林のサクラの中ではエドヒガンが王者の風格である。林道の端に巨木が数本健在であるが、下の

①マンサク

②キブシ

③ダンコウバイ

方の枝は枯れ上がってしまって、花は双眼鏡で見上げないと見えない。その幹はソメイヨシノやオオヤマザクラなどと違って深い縦皺を示しているので、識別は容易である（写真⑥）。

お気に入りの夏鳥は エゾムシクイ

夏鳥として渡ってくる鳥たちの中で私の一番のお気に入りはエゾムシクイである。カレンダーでは五月二日のところに出ている。毎年、五月の連休の頃だけ演習林の、それも演習林への入口の吊り橋付近にだけ現れる。大きさは一二五ミリとスズメよりずっと小さく、暗緑褐色で目立たない。ものすごく高く細い声で「ヒーツーキー、ヒーツーキー」と鳴くので、人間の耳には聞きとりにくい。数日、吊り橋付近にいて直ぐに標高の高い所へ移動してしまう。このエゾムシクイの鳴き声を聞くと、今年もいつものように春が来たなと感じることができる。

新緑の森の美しさ

五月に入るとカエデの類が地味な花を咲かせるが、校舎の窓（現在は木曾山林資料館になっている建物）から正面に大きなイタヤカエデが見えて、そのボリュームのある樹形が素晴らしい（写真⑦）。

五月の一〇日前後の演習林は新緑がもっとも美し

④ツノハシバミ

⑤エドヒガン

⑥エドヒガン(幹)

い時だ（写真⑧）。一本一本の樹の新緑がみな色が異なるのだ。それが一週間もしない内に濃い緑に収斂していく。

やがてウワミズザクラ（写真⑨）の真っ白な横向きの花が林縁部に目立つようになり、六月に入るとトチノキの花が咲き、野鳥に替わってエゾハルゼミがやかましく鳴き出す。下旬にコアジサイやヤマアジサイが咲き出すともう森は初夏である。

以上が木曽山林高校の演習林の春の訪れを描写したささやかなドラマである。ちなみに、この演習林は日本森林学会によって林業遺産に認定されている。

おわりに

この観察をおこなった昭和五三年から四〇年近い時間が経過したが、あの時の野帳を引っ張り出して春の訪れを再現させる作業を楽しんだ。平行して毎週木曜日に木曽に出かけて樹の花の写真を撮った。昔もカラースライドをたくさん撮ったが、デジタルデータで構成する現代の文章作成には合わないので、新しく撮影しようと張り切ってみたが、思うように体が動かなかった。（マンサクは昔のスライドからスキャナーでデジタル化したが、あとはすべて二〇一七年春の写真である。）

演習林は外から遠望するとあまり変わっていな

⑦イタヤカエデ

⑧新緑の森

⑨ウワミズザクラ

いように見えるが、歩いてみると四〇年の歳月による変化はあちこちに見られる。第一に全体として樹高が高くなり、樹冠がくっつき合ってしまって林内が暗くなった。そのために林床の灌木や下草が極端に減ってしまったし、林縁部もさびしい状況だ。

第二に、競争に負けて消えてしまった樹もかなりあるのではないかと思われる。私が気にしていたミヤマザクラやザイフリボクは残念ながら今年は見つからなかった。

第三に、野鳥は今回まとめたカレンダーでは種類が少ないように感じるかもしれないが、それは夏鳥に絞ったためで、演習林の主力である留鳥を入れると、昭和五三年の時点で冬鳥は除いて四二種確認されている。種類はともかくとして、数は今回かなり少なくなっているというのが率直な感想である。植生が単純化し、その上林内が暗くなったことが、野鳥たちの生息環境としてはマイナスなのであろう。

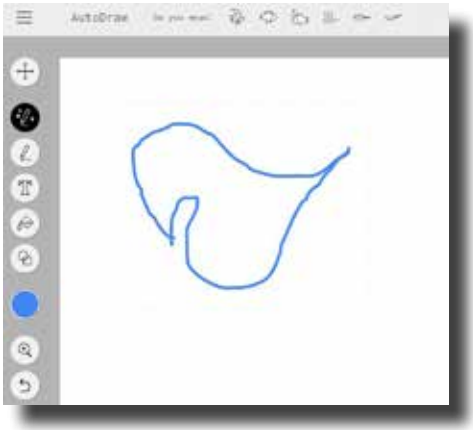
最後に「上田図書館倶楽部」関係者の皆さまに、四回にわたって私に駄文を書かせて頂いたことに感謝申し上げます。

私自身の信州での五〇年間を、改めて思い起こし見直させていただけたことは、いよいよ終末期を迎える私にとってまたとないありがたい機会でした。初心に戻って信州の自然を楽しみたいと思います。

おもしろWeb

簡単イラスト制作ソフト
https://www.autodraw.com/

ちょっとしたカットが欲しいときに使えるweb上の無料イラスト作成ソフトです。画面のように適当に描けば、当てはまりそうなイラストを示してくれるので、選んで色づけをしてダウンロードするだけ。お試しください。



波紋

昨秋発行した24号の「躍働」に登場していただいたベトナム女性、ズオン・ティ・ゴック・フェンさん（27歳）が4月下旬、半年ぶりに来日した。24号では、技能実習生として上田市内の自動車部品工場で働く傍ら、日本語習得に熱意を注ぎ、日本文化を積極的に吸収する姿を紹介した。フェンさんは昨年10月、３年間の就労期間を終了して帰国した。豊富な体験と日本語能力試験Ｎ２（注）合格という大きな土産を持って。

母国では、日本語を生かせることを基準に就活の末、人材派遣会社に就職した。配属先は営業部。今回の再訪は営業出張だ。ベトナムと日本企業との橋渡しが主な任務で、１か月の滞在中、北は青森、山形から南は熊本まで７～８か所を回るハードスケジュールだ。

営業の合間に上田で会うことができた。開口一番、「大好きな日本にまた来ることができ、とても嬉しいです」。瞳を輝かせながら話すフェンさんは、昨秋見送ったときより、社会人として一回りも二回りも大きくなった印象だ。日本語も一段と上達した。「営業は大変でしょうね？」「ええ、でも自分の言いたいことがスムーズに表現できたとき、交渉がうまく運んだときは、この仕事に就いて良かったなと思います」と自信をのぞかせる。誠実な人柄、前向きな姿勢などが実を結んだ結果だろう。

別れ際、「職種には拘りませんが、これからも日本と関わりの持てる仕事をしていきたい。そのためには絶対Ｎ１に合格しなければ」と、にこやかな表情の中に強い意志を見せる。

フェンさんならきっとやり遂げるだろう。はるか日本からエールを送りたい。（木漏れ日）

注：外国人向けの日本語試験　Ｎ１からＮ５までありＮ１が最も難しい
ＮはNihongoとNew（2010年に改訂）の頭文字　日本国外でも受験できる

セカンドライフを楽しむ

チャレンジこそ人生

橋詰一夫さん

「上田を活気のある住み良い街にしたい」。上田市ちびっこスポーツ少年団長、観光ボランティアガイドなどに熱意を注ぐ橋詰一夫さんの活動の原点だ。橋詰さんは上田市上田原在住の65歳。これらを始めようと思ったきっかけは、6年前の東日本大震災だ。ボランティアとして赴いた岩手県大槌町の惨状を見て茫然自失。一瞬にしてすべてがなくなってしまう現実に、それまでの価値観が一変した。以来、「これから何をしなければならないか、何ができるか」を考え続けたという。昨年からは、市内の史跡にまつわる民話を創作して、地域起こしにつなげる活動も始めた。

お忙しい中、5月上旬上田情報ライブラリー市民サロンでお話を聴くことができた。戸外活動が多いからか引き締まった体格に日焼けしたお顔。お話が上手で、ポンポンと飛び出す言葉と一緒に、パワフルな行動力が伝わってきた。

Q　お聞きしたいことがたくさんあるのですが、まず上田市ちびっこスポーツ少年団についてお聞かせください。どうして立ち上げようと思われたのですか。

A　東日本大震災のボ

ランティアとして計7回大槌町に行きました。当初は泥上げやがれき処理などの作業に当たり、その後は避難所生活支援にまわりました。不自由な生活の中で、お互いを思いやる被災者の方々の姿に感動しました。そんな中、まず元気になったのは子どもたちでした。無邪気に動き回る姿、明るい笑顔を見て、大人たちも少しずつ元気を取り戻したのです。そんな状況を目にして、「子どもは宝」としみじみ思いましたね。子どもたちに関わりたいと思ったきっかけです。

老人ホームへ慰問

Q　具体的にはどのような活動をされていますか。

A　休日を利用して、サッカーや野球、バドミントンなど私たち指導者とコーチが連携をとりながら進めています。子どもたちにスポーツの楽しさを知ってもらいたい、というのが一番の目的です。この少年団の特徴は、お父さんお母さんにも参加してもらうことです。子どもたちの送迎や見学だけでなく、子どもたちと一緒に身体を動かす。これによって家庭に帰っても話題になる、そんなねらいがあります。このやり方が良かったのか、当初数人だった団員は現在50人以上です。

Q　団員が50人以上とは活気がありますね。でも指導者、コーチ、保護者、子どもたちをまとめていくのは並大抵ではないと思います。

A　そうですね。組織が大きくなると、どうしても不和やつまずきが生まれます。そういう時は「理念に戻る」を肝に銘じています。「何のために始めたか?」を思い起こすことによって自ずと解決策が見つかります。

Q　次に観光ガイドについてお聞かせください。昨年はNHK大河ドラマ「真田丸」の放映でお忙しかったでしょうね。

A　誘致活動から携わり、放映前から上田城櫓門前に立ちまし

た。観光客が徐々に増え忙しかったですね。放映開始前は歴女が多く、開始後はシニア男性が俄然増えました。それもグループが多かったですね。脚本家の三谷さんの描き方が良かったのでしょう。真田一族の生き様が男心に火をつけたのではないかと思っています。「黙れ小童（こわっぱ）！」なんて今時なかなか言えませんよね、言いたくても（笑）。観光客とのキャッチボールは楽しかったですねえ。質問攻めにあいましたが、刺激もたくさん貰いました。「幸運をもたらす客人（まれびと）をもてなす」という日本文化を実践することができたように思います。

上田城で観光ガイド

Q　去年の賑やかさを思い出します。今年はやはり観光客が減ったように見えます。寂しいですね。

A　放映後も観光客に来てほしくて、最近力を入れているのが創作民話です。由緒あるけど目立たない市内の史跡に物語を添えて広める活動です。例えば保野にある龍昌院、真田信之が1615年に建立したことから、「建てた目的は九度山で亡くなった父、昌幸を弔うためだったのでは？」と思い、物語を作りました。また、野倉にある夫婦道祖神にはラブストーリーを。これらを週2回、別所の温泉旅館で披露しています。宿泊客の心に少しでも残ればと願っています。

橋詰さん作の民話

Q　多岐にわたる活動に驚くばかりです。とてもお元気そうに見えますが、健康管理はどのようにされてい

ますか。

A　趣味はゴルフと温泉ですね。ゴルフのハンディは普通です。良過ぎると嫌われるし、悪過ぎると足手まといになる。人並みに回って楽しんでいます。また、上田周辺には手ごろな温泉がたくさんあり恵まれていますね。リフレッシュに最高です。

Q　最後にこれからの抱負をお聞かせください。

A　いろいろなグループが地域愛に基づいた活動をしています。彼らとのつながりを密にして、接着剤のような役割を果たせたらいいなと考えています。そのためには柔軟性を失わないようにしなければと思いますね。

2年前まで働いていた橋詰さんのキャリアは多彩だ。東京地方検察庁検察事務官、小学校の庁務員、建設事務所で河川管理など。だが仕事については多くを語らない。「終わったことより今が大事」ということだろう。

「チャレンジこそ人生、失敗大いに結構。チャレンジしなかったら失敗もない」と語る橋詰さんの張りのある声からパワーをもらった気がした。

平成29年　5月8日取材
伊藤文子

おもしろWeb

専門図書館

専門図書館は、公共図書館や学校図書館とは異なり、官庁などの公的機関や美術館・博物館などの調査研究機関、企業・団体等が設置運営しています。公文書・新聞・雑誌・書籍など特定分野の資料を収集管理したり、点字図書を提供するなど、特定の目的に特化した専門図書館もありますから、調べものに活用してみましょう。

専門図書館の一覧
専門図書館リスト（カーリル）
https://calil.jp/library/special
専門図書館が所蔵する資料を探す
dlib.jp　ディープライブラリー
https://dlib.jp/

ぶらり散策

伊勢宮大神宮

伊勢宮大神宮は、上田市中央交差点から海野町商店街を抜け左折して直ぐの所に建つ。横町にあることから地元では「横町伊勢宮」とも呼ばれている。ここには、天照皇大神宮と農業の神様である豊受大神宮が祀られている。

毎年1月14日から15日にかけて、ここで「おたや祭り」が開催され、だるま市など多くの露店が並ぶ。かつては、だるまや食べ物、台所用品などの店が表通りまであふれていたという。柳の枝に繭玉を挿した飾り物が目玉で、米粉を赤、青、黄などに色付けし、丸めて枝につける。それを売る露店は一段と華やかだった。

子供の頃、この祭りの日には親から小遣いをもらって友達と連れ立って神宮まで歩いた。今のように街灯も明るくなく、祭りの会場だけが煌々と輝いていた。商店主の客寄せの声が祭りの広場に幾重にも広がって、ワクワクした。昔ほどではないが、今でも14日は夕方から夜更けまで家族連れなどで賑わう。

「おたや祭り」は伊勢神宮に倣い、20年ごとに遷座祭が行われたことに始まる。「おたや祭り」の名の由来は、伊勢神宮の御師が布教のために訪れた際の宿泊施設「御旅屋」からとされる。

伊勢宮大神宮正面拝殿の右手には御神馬の白馬像が祀られている。1年に一度御神馬の小屋の扉が開かれ、全身が現われる。優しい目をした神馬が、幸福を祈る人々の思いを受け止め続けている。

四条公神社

同じ敷地内にある四条公神社は、1月14日「おたや祭り」と5月最終日曜日の「四条公祭」を行なっている。これは、生命の源である食に感謝し調理に使う包丁の安全祈願と、供養をするものである。上

田市内の飲食店、鮮魚店だけでなく、一般家庭の食と安全祈願も行われる。家庭で不要になった包丁の回収もしていて、供養された包丁は岐阜県の関係団体に送り、ステンレスや鉄として再利用される。

上田自由大学

上田自由大学は、大正10年（1921）11月1日、伊勢宮境内の神職合議所で開講した。

自由大学立ち上げに貢献したのは、神川村の山越脩蔵らである。大学の趣旨は「労働しつつ、自由に大学教育を受ける」ことであった。聴講生には一切の制限を置かず、男女を問わずに学ぶことができた。恒藤恭、タカクラテル、出隆、土田杏村など錚々たる講師が招かれた。哲学、哲学史、論理学、美学、社会学、心理学、宗教学、教育学、文学概論、法学、経済学、社会政策の十二講座が行われ、熱心な受講者が集まった。

上田で始まった自由大学の試みは各地で反響を呼び、その他の地方都市や農村に波及していった。だが、上田自由大学は1925年頃からさまざまな運営上の困難に直面するようになり中断、その後再建されたが、1930年にその幕を閉じた。

合議所の瓦と石碑

現在、神職合議所は取り壊され、合議所の鬼瓦と「神職合議所のこと」の石碑が建つだけである。道路に面して建つ石碑に、多くの人は気づかずに通り過ぎてしまう。ここに上田自由大学があり、多くの先人たちが熱く学んでいたことを知ってほしいと思う。

平成29年5月30日　　吉池みどり

上田情報ライブラリーでは今・・・

「地図に見る上田地域の変化」

第2回　桑園はどう変わったか

のどかで緑豊かな上田地域、田植えも終わり、水田をわたる風が心地よく感じます。

自分たちの暮らす地域が、かつてどのように活用されていたのか。また、そこから風土の特徴を知り、これからの暮らしにどう役立てていくのか。古い地図や資料から様々な情報を読み解き、今を生きる私たちの暮らしへのヒントを探ります。

上田情報ライブラリーでは、４月から９月まで全６回にわたり、「地図に見る上田地域の変化」と題し講座を開催しています。講師は、平成27年に開催して好評だった講座「地図をひらけば街がみえる」の長野県地理学会顧問の佐々木清司さんと上田社会教育大学講師の尾崎行也さんです。農業、商工業、交通網、住宅の分野ごとに紹介、今回は５月27日（土）第２回、佐々木清司さんの「桑園はどう変わったか」の講座を受講しました。

会場のセミナールームには、大きなスクリーンに大正６年当時の参謀本部が作成した上田市周辺の地図が映し出されていました。その地図は、地図記号に沿ってカラフルに色分けしてあり、中でも多くを占める紫色が目を引きます。それは当時あちこちに広

長野県地理学会顧問の佐々木清司さん

がっていた桑畑で、養蚕が県内第２位と盛んだった上田市の様子をわかりやすく表現した地図でした。養蚕を営む人口は、上田市7,500人、県内1位の諏訪は25,000人だったそうです。それが、100年のうちに全てなくなってしまった……。ここにはどんな背景があったのでしょうか？

よく見ていくと、塩田平で養蚕が盛んだったことがわかり、山の上まで桑畑があります。また河原にも桑畑が広がり、こんな場所で？と心配になるような中洲です。ですが、河原流域の環境が蚕の卵（ぶぐわ）をとるのに好条件だったと聞いてなるほどと納得しました。

上田盆地を流れる千曲川は急流で、洪水によって石ころだらけの河原になってしまうのですが、石を抜いて周りに積み上げ、そこへ桑を植えると良い畑になりました。西風が強く、桑が揺れるので、蚕の寄生虫であるうじバエが産卵できず生きていけないため、優秀な種が獲れました。最高にいい環境だったようです。

しかし、度重なる洪水の後復旧させるには時間がかかりすぎるという問題も抱えていました。千曲川はすぐ流路を変える危ない川でもありました。良い種をつくらないと売れない！　桑を早く採らないと蚕糸業にならない！　山地へ桑畑の開発をはじめた頃の懇願書も残っておりスクリーンに映し出されました。虚空蔵山に二百坪、また五百坪など、太郎山は標高1,000mレベルまで桑が植えてあり、可能な限り桑畑を広げていった様子が見て取れました。今でも産業遺跡が残っているそうです。秋和の辺りから虚空蔵山方面を映した写真が示され、「雪が５cmくらい降った時に段々畑の様子がよくわかるんです」と、当時の面影を垣間見ることができました。

同時に、石を積み上げた段々畑や桑の木などの保存も大切で、後世に残していきたいとのことでした。

明治に入ると、大きな洪水で河原周辺の良い畑が広範囲で流されてしまい、失業者が増えました。千曲川の堤防工事が本格的に進んでいきます。常田新橋の少し先に、大正時代に作られたとても立派な堤防があるのですが、かなり高度な技術が使われているそうです。「一度見に行ってください」と佐々木さん。また時代も変化し、河原は上田飛行場へと姿を変えてゆきます。その後上田飛行場は、陸軍のものとなり、岩鼻特有の西風は、短い距離でも飛行機が飛びたてる向かい風

として利用されるようになっていきました。

戦時下の桑畑はどのように変化していったのでしょう？　食糧難で、桑畑は馬鈴薯や甘藷などが植えられ、昭和17年には麦作りの指示が出され、桑園は減少していきます。20年には桑畑転換で大豆の緊急整備事業があり、養蚕農業を営む農家は、昭和5年11,130戸だったものが、昭和30年には7,630戸と、減少の一途をたどったようです。またボンビック方式の養蚕へと進化し、今までは「お蚕様」と一頭一頭大切に育てられ、手間暇かかっていた作業も機械化され、少人数でも大量生産できるようになり、まったくイメージが違う養蚕へと変化していきました。いつしか桑畑は、果樹園などに移り変わり、例えば山口扇状地では、現在りんごやぶどう栽培が盛んな地域となり、ワインの産地へと動き始めています。また住宅地も増え、現在も変化し続けているとのことでした。現在の地図を眺めながらも感慨深いものがありました。

佐々木さんは、「地図は古文書と同じです。また広範囲で読み取れるため、視野が広くなり、発見がある。面白くて飽きないのです」とやさしく穏やかな笑顔で話されました。

上田情報ライブラリーの飯島館長より、「郷土を知ってほしいと企画しました。わたしたちの生活の移り変わりを知り、先人の方の努力を感じ、今後に生かしていきたいと思います」との冒頭のメッセージで始まったこの講座は、現在も申込みを受付中です。

そして、今回の講座で使用された地図は、上田情報ライブラリー、上田図書館、長野県立図書館、長野県立歴史館で保管されていて、どなたでもご覧いただけます。お気軽にお越しください。

平成２９年５月２７日取材　　望月　聡子

桑園

観点

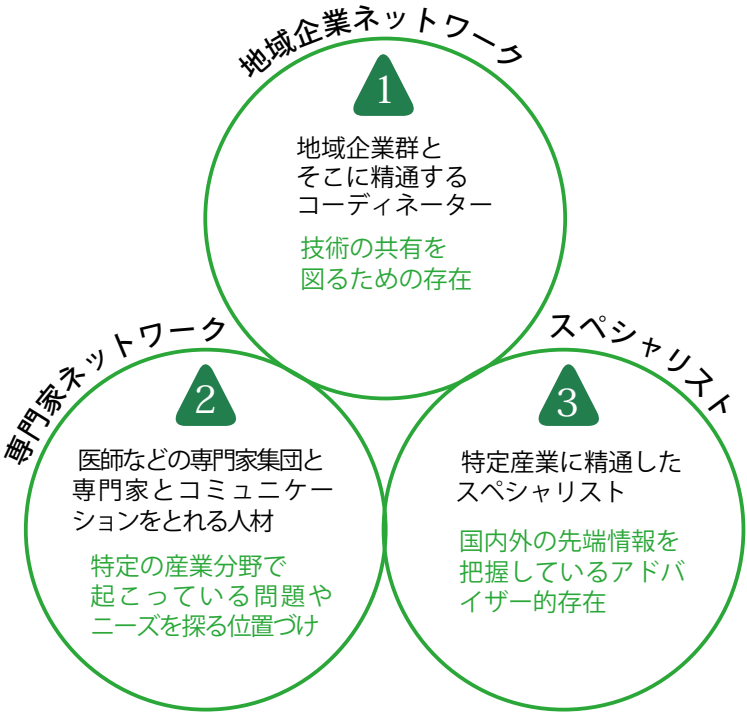
～明るく大胆な未来予測から考える地域づくり③～

過去2回にわたり、「10年後の若者は、働き口に困らない」「10年後、地方に若者が残り、人が集まるようになる」という明るい未来を述べた。地域に住む人が増え、働ける若者も増えるということは、受け皿となる地域産業も明るく大胆な未来予測に基づいて発展していく。

東信地域では現在、高校生から就労技術を学べる教育ネットワークの構想が進められている。従来は各中小企業が個別で行っていた新人教育や技能研修を、地域一体となって進めていこうというものだ。各企業が教育にかけていたコストや手間が縮小されるとともに、産業界全体のレベルアップにもつながると期待されている。これがうまく機能し、高い技術が習得できる教育ネットワークが作られていけばどうなるだろう。若者からの注目も集まり、さまざまな人材が集まってくる。質の高い技術力に他業界・他地域からの関心も高まるに違いない。

もう1つ、地域産業が作っておくべきネットワークがある。それがある特定の分野の産業に特化した連携システムだ。連携システムは3つの分野で構成される。①地域企業群とそこに精通するコーディネーター、②医師などの専門家集団と、専門家とコミュニケーションをとれる人材、③特定産業に精通したスペシャリストだ。地域企業ネットワークは技術の共有を図るために存在する。専門家ネットワークは特定の産業分野で起こっている問題やニーズを探る位置づけだ。スペシャリストは国内外の先端情報を把握しているアドバイザー的存在で、必ずしも地域に常駐している必要はない。この3峰が機能すれば、高度な専門性が求められる医療や航空・宇宙分野に参入する糸口がみえてくるはずだ。

とはいえ、必ずしも手術を行う医療ロボットを開発したり、ロケット製造に携わったりする必要はない。医療機器の管理を強化するセキュリティシステムであったり、研究開発のための機械製造であったりと、その周辺に多数存在するニーズを拾い集めていくことこそが重要なのであ



る。これらを積み重ねていけば「10 年後、次世代産業に対応した地域のブランド力が作られる」はずだ。明るい未来が待っている。

今の若者たちは、本格的な飢えや競争社会を経験していない世代で、いい意味でフラット。その中で世界との激しい競争に勝つことを目指す若者が必要なことは勿論であるが、競争しない生き方を見つけてもいい。これからの地方は、地方なりの明るく大胆な未来予測に基づいて行動したほうが良い。そうしてみんなが前を向きながら、その地域なり、若者なりの幸せと特色を築ける世の中を目指していくのだ。下を向く必要は全くない。

一般財団法人 浅間リサーチエクステンションセンター(AREC)
センター長・専務理事
信州大学 繊維学部 特任教授 (工学博士)　岡田基幸

信濃を旅した文人たち

田端画かき村と文士村、そして信濃へ

明治中頃まで、田端は雑木林や田畑が広がる静かな農村地帯だった。明治22年、上野に東京美術学校（現・東京芸術大学）が開校すると、その景色は変貌していく。上野と台地続きの田端に、多くの芸術家たちが下宿するようになったのだ。明治29年に田端駅が開業すると、住宅地としてさらに変わっていった。

先人を切ったのは、団子坂にある画塾「不同舎」で学んでいた画家小杉未醒（みせい）である。次いで、陶芸家の板谷波山が移り住んで窯を造る。ふたりは田端画かき村の先駆けとなった。

東京美術学校で学んでいた山本鼎も、20歳の時に田端に下宿。翌年、版画《漁夫》を『明星』に発表、日本における創作版画の道を切り開いたといわれる。明治40年には、鼎、石井柏亭、森田恒友が版画同人誌『方寸』を創刊。後に、倉田白羊、小杉未醒、平福百穂らが加入した。

「田端に一度も住まなかった画家は少ないだろう」といわれるほど、次第に芸術家たちが集まってきた。田端は日本のモンマルトルと称され、芸術家の巣となっていく。明治43年には、未醒らが中心となってテニスコートやクラブハウスがある「ポプラ倶楽部」を創設。塀のかわりにポプラを植えたことから名付けられた倶楽部は、芸術家たちの社交場となって賑わった。

大正3年、ひとつの転機が訪れる。東京帝国大学の学生だった芥川龍之介が、田端駅近くに移り住んだのである。芥川はいちはやく彼らに目をつけた。

「近所にポプラ倶楽部を中心とした画かき村があるだけに外へ出ると黒のソフトによく逢着（ほうちゃく）する　逢着する度に芸術が紺絣を着てあるいてゐるやうな気がする」と、親友宛ての手紙に書いた。当時、芥川家の周りにも芸術家が住んで

いたが、文学者はほとんど見当たらなかったという。

在学中から執筆活動を始めた芥川は、24歳の時、久米正雄、菊池寛らと創刊した「新思潮」に『鼻』を掲載、夏目漱石から激賞される。一躍文壇の寵児となった芥川は、次々と作品を発表していく。

大正5年には室生犀星が田端に下宿。後に、芥川と共に文士村の中心となる人物だ。その後、野口雨情、サトウハチロー、菊池寛、堀辰雄、萩原朔太郎など、作家や詩人たちが移り住んできた。

秀でた才能を持ちながら、芥川は下町育ちらしく人懐っこく、人々を惹きつけた。彼の書斎「我鬼窟」には多くの文学者が集い、田端は文士村の様相を呈していく。

しかし、昭和2年、田端に衝撃が走る。僅か35歳で芥川が自死。脚光を浴び続けた芥川だったが、神経を病み、常に疲労と倦怠を抱えていた。この地に住んで13年、芥川は日本文学史上に大きな足跡をのこして去った。芥川を失った田端は、次第に静かな住宅街へと戻っていく。

現在の田端を歩いてみる。田端駅からすぐの所に「田端文士村記念館」が建つ。記念館では文士、芸術家たちの原稿、書簡、絵画、彫刻などを展示、彼らの業績や暮らしぶりを紹介している。映像コーナーの他、企画展示も随時開催される。

田端文士村記念館（東京都北区田端）

昭和20年4月13日の空襲で、田端は焼け野原となってしまった。そのため当時の建物は残っていないが、記念館発行の田端散策マップ片手にゆかりの地を巡ることができる。

モデルルートに従って記念館か

常設展示室入口（向って右が犀星、左が龍之介）

ら6分ほど、まずは芥川龍之介旧居跡をめざす。閑静な住宅街の角地に建つ案内板は、うっかりすると見過ごしてしまいそう。古い万年塀が続くが、これは当時のものではないようだ。

旧居跡から与楽寺坂を下り、芥川の主治医だった下島勲宅付近を通り過ぎる。しばらくして、赤紙仁王像で有名な東覚寺がある。糊のついた短冊状の赤紙2枚と線香2束を購入。二体の仁王様の、自分の身体の悪い所と同じ個所に赤紙を貼って祈願すると病気が治るという。参拝客が絶えないようで、全身赤紙で覆われてしまった阿吽(あうん)像はどこかユーモラスだ。若き日、小杉未醒たちが酔った勢いでこの仁王像を倒してしまったというエピソードが残る。

東覚寺から歩いて数分、小杉未醒宅跡は現在田端区民センターになっている。26号で紹介した画家の村山槐多は、上京後山本鼎の紹介で未醒邸内の離れに住んだ。倉田白羊や竹久夢二も一時このあたりに住んでいたという。堀辰雄の最初の下宿「大盛館」もすぐ近くだった。

そこからポプラ坂を辿ると、「ポプラ倶楽部」跡地に行きつく。現在は田端保育園が建つ。隣は山本鼎が最初に住んだ場所、そして陶芸家・板谷波山旧居跡である。室生犀星は田端の中で転居を繰り返したが、3回目そして6回目に住

芥川龍之介旧居跡はひっそりと

街角の案内板

東覚寺の赤絵仁王像

んだ場所に案内板がある。ここには菊池寛が一時住まったという。他にも著名な文士、芸術家たちが足跡をのこす。

さて、彼らの中には信濃を訪れた芸術家や文人が大勢いた。その中から何人かふれてみたい。

信州上田で活躍したのは、山本鼎とその仲間たちだ。5年間のヨーロッパ滞在から帰郷した鼎は、子供たちに自由に絵を描く尊さを教える児童自由画教育を推奨、全国で普及に貢献した。また、農民たちの生活を豊かにするための農民美術運動を始め、講師には小杉未醒、倉田白羊などそうそうたる芸術家たちを招聘。大正12年、大屋に日本農民美術研究所が建てられ、農民美術運動は全国各地に広がっていった。鼎の功績や作品は、上田市立美術館に常設展示されている。

上田市立美術館

彫刻家で画家の石井鶴三は、大正13年、鼎の紹介で小県上田教育会主催の彫塑講習会の講師となる。東京から通いながらの指導は、昭和45年まで実に47年間続く。自身も創作をしながら熱く指導、彫刻家や美術教師を輩出させている。その間、東京芸術大学教授も務めた。上田は鶴三にとって第二の故郷となり、彼の作品もまた常設展示されている。

上田に転居して鼎の活動を長く支えたのが、画家の倉田白羊である。郊外の大久保にアトリエを建て、農村風景を描きながらホームスパンや農民美術運動などに尽力した。こうして、信濃の地でも画かき村の友情と絆は続いた。

一方、避暑地軽井沢は文人たちにとって格別な空間だった。堀辰雄は恩師・広瀬雄の紹介で室生犀星を、犀星によって芥川を知り、ふたりを生涯の師とする。大正12年8月、一高生だった堀は軽井沢に滞在中の犀星をたよって初めて軽井沢を訪れる。

「一日ぢゅう、彷徨ってゐる。みんな、まるで活動写真のやうなものだ。道で出遭うものは、異人さんたちと異国語ばっかりだ」と、

堀辰雄終焉の家（軽井沢町追分）

友人に書き送った。

大正13年夏、芥川はつるや旅館に犀星と同宿、谷崎潤一郎、山本有三、そして堀辰雄らと交流した。軽井沢に魅せられた芥川は翌年もつるやに滞在、田端から多くの文士たちが集った。

一流の文学者たちと過ごす異国情緒あふれた軽井沢は、堀文学の原点になる。以来、毎年のように軽井沢や信濃追分に滞在、創作を続けた。昭和13年には加藤多恵と結婚、別荘を借りて住んだ。昭和26年、追分に新築した家に移るが肺結核が悪化、2年後48歳で亡くなる。軽井沢をこよなく愛した作家は、この地を舞台に数々の名作をのこした。

迷いながらの田端散策を楽しんだ。画かき村と文士村は確かに存在した。タイムスリップして街中を闊歩する彼らの姿が見え隠れしそうな、そんな気がした。

海野　郁

（参考文献）

『文壇資料　田端文士村』近藤富枝著　講談社
『長野県文学全集　第5巻』郷土出版社
『山本鼎と倉田白羊』小崎軍司著　上田小県資料刊行会
『上田大紀行』上田大紀行刊行会
『新潮日本文学アルバム　芥川龍之介』新潮社
『新潮日本文学アルバム　堀辰雄』新潮社

あとがき

3月下旬、長野市篠ノ井に「篠ノ井タウン大学」がプレオープンした。龍鳳書房代表取締役の酒井春人さんらが数年前から構想を練り、視察や話し合いを重ねて実現にこぎつけた。本格的な大学並みの講座を目指しており、来年４月に正式開講の予定だ。目的は、① 個々人の教養を高める　② 学ぶ者同士の交流の輪をつくる　③ 篠ノ井中心市街地の活性化の３点だ。

プレ講座第１回目は、篠ノ井駅から徒歩５分の空き店舗で開かれた。「車を利用しなくても行かれる場所で開く」もコンセプトの一つだ。テーマは「シナノから科野へ、そして信濃へ」。多くの人に興味を持ってもらえるよう考古学が選ばれた。講師は長野県立歴史館学芸員の西山克己さん。春の息吹が感じられる中、定員の60人をはるかに上回る参加者が集まり、学習意欲の高さをうかがわせた。

長野県における弥生時代から古墳時代にかけての古墳から見たクニづくりに焦点を当てた講義にメモをとる人も多く、終了後は質問が相次いだ。閉会後も熱意さめやらぬ様子で、初回は盛会裡に終わった。プレ講座は今年度中に５回開くことになっており、テーマは歴史学や文学、社会学などアンケートを参考にしながら進めていく予定だ。

酒井さんの構想のモデルは、ドイツのハイデルベルグ大学だ。街全体が大学になっており、世界中から人が集まってくる。そのアカデミックな雰囲気にすっかり魅せられ、このような街大学を長野県でも実現させたいと考えている。　　（木漏れ日）

KAN
環　千曲川地域の人と文化　　第 27 号　夏姿
2017 年 7 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部
電話 /FAX　0268-25-3115　　info@zuku.jp

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます。

環スタッフ：伊藤文子　海野 郁　西入幸代
宮下明彦　望月聡子　矢幡正夫　吉池みどり